

国文学研究資料館報

第30号

昭和63年 3月

ハンガリーの日本研究

——客員半年の管見——

福田 秀一

一、はじめに

昨年の一月下旬から八月末まで七箇月余り、国際交流基金の派遣でブダペストのエオトヴェシ・ロラント大学に客員として赴任し、日本文学を講ずるかたわら、ハンガリーや近隣諸国の既知の日本研究者達を訪ねたり、最近の日本研究の様子を瞥見したりしてきたので、それについて書けとの編集委員会の要請である。ハンガリーはまことに親日的な国で、公私各面でお世話になった邦人や現地人のこと、生活習慣やものの考え方などさまざまに興味深い日本との相違、更にはほとんど学んでいかなかったハンガリー語で当初苦労したまた愉快な失敗をしたこと、しかしカタクトでも度胸と機転で結構通じる

こと、そして初めてあるいは二度三度訪ねた東欧諸国の日本研究者のことなど、披露したいことはいろいろあるが、紙数の関係で今回はハンガリーに限り、それもカタイ話で御容赦を乞う。

二、エオトヴェシ・

ロラント大学

開講まで 赴任したこの大学は、東欧だからもちろん国立、旧称ブダペスト大学、ハンガリーの東大に当り、この舌を噛みそうな名は、前世紀から今世紀にかけての物理学者Eötvös Lorándの名をとって一九五〇年に改称したもの、略してELTE(エルテ)と言う。TEは総合大学を意味するハンガリー語に由来する。現在法・文・理の三学部といくつかの研究所があり、

ハンガリーの日本研究……………福田秀一……………	1
一次 文庫紹介◎東京芸術大学付属図書館蔵本文庫……………	5
共同研究報告……………	6
昭和六三年共同研究実施予定……………	6
情報処理システムのレベルアップについて(安永尚志……………)	7
新収和古書抄(昭和六二年……………)	10
新収資料紹介◎小教養……………	11
整理閲覧部だより……………	12
電報……………	13
国際日本文学研究集会……………	14
公開講演会……………	14
利用者へのお知らせ……………	15
昭和六三年度春季学会開催一覽……………	16

その文学部の「中国東アジア学科」の中に一九八六年九月から「日本文学」の講座が開かれて、専門科目の「教授」ポストを交流基金負担の客員でまかなうことになり、初年度の私は「日本文学」を担当する一方、今後の日本学専攻(いわばコース)のスタッフや図書の実法などについて助言を求められたのである。

私の授業は後期の最初すなわち二月中旬からということになったが、その前に学科の会議と日本専攻の学生達との打ち合わせがあった。前者は学科主任のガツラ博士(中国文学専攻)から中国東アジア学科のスタッフ(総勢一〇人ほど)全員に紹介されるセレモニーで日本の大学でも普通のことだが、後者は学部では珍しいと思った。学生達とわれわれ教官(私と同大で今まで日本語を教えてきた日本人講師山地氏と後述のヤノ一君)とが一堂に会して、時間割の相談

にわあわあ言い出して最初はどうかなることかと思っていたが、そのうち何とか取捨がつき、二月十日から授業に入った。

科目と授業方法

ここで、この大学の八六〇八七年度の日本専攻の開講科目と担当者を挙げてみる（順不同、各週一回、九〇分）。

① 日本文学入門 必修 福田

② 現代日本語 同 山地講師

③ 日本事情 同 同

④ 近代日本小説 選択 ヤノー助手

この他に私は⑤「卒業生対象特別ゼミナール」（あちこちで日本語を教えている人や科学アカデミー東洋文庫の職員、ヤノー君など六七名が参加）を持ち、また山地氏と私は⑥「個人面談」（質問・相談に応じるべく研究室に待機する時間、アメリカの大学のオフィス・アワーに当る）を一コマ設けていた。

さて私の一番の任務である①だが、日本文学を主として、できればその周辺（例えば美術や音楽・芸能など）をも講ずることに決め、先ずは日本文学史の概略、ついで日本文学のジャンル・理念等、その後余裕があれば日本文化の他分野をも扱うつもりで、その旨最初

の時間に学生に予告した。なお前期にはヤノー助手が、日本民族と日本語の起源に関する諸説や奈良時代頃までの歴史を講じた由である。

問題は山地氏と違ってハンガリー語のできない私が、何語でやるかである。前述のようにこの「日本専攻」は前年九月に発足したばかりで学生は全員その第一期生であり、日本語初歩のコースである②を習い始めて半年、彼等の日本語能力は平仮名・片仮名と若干の漢字が読めてごく簡単な会話ができる程度だから、日本語でというわけには行かない。出発前の基金の話では英語でやることになろうとのことで、一回目の「まえおき」（全体の計画や授業の進め方など）と「序説」（日本文学史の参考書・時代区分等）を英語で始めたところ、何人かが分らないと言い出し、必要に応じて通訳してくれる約束で陪席していたヤノー助手が逐一通訳する羽目となった。後で知ったところでは、学生達の皆が英語を解するわけではなく、かつその英語力にも個人差があり、ドイツ語も同様、義務教育で四年間必修のロシア語は日本人の英語と同じ

くほとんどの者がダメの由で——尤も私のロシア語は講義ができるほど堪能ではない——、どうせヤノー君に通訳して貰うなら日本語でやった方が彼等の日本語学習のためにもよいということになった。但しそのために、私とヤノー君とで次のような準備をした。すなわち私が、次回の講義内容の要点を学会発表のプリントよろしくレポート用紙一―二枚にカーボン紙で二部複写して、その一部（もう一部は私の控え）とそれに沿って下宿で吹込んだカセット・テープ（約三〇分）とを毎回の授業の後に彼に渡し、彼は週末に自宅で私のレジュメを見ながらテープを聴いて、講義内容の予習をする。そして教室ではほとんど同時通訳をやつてのけるのである。彼の日本語能力（そして英独仏露語も）は抜群だが、通訳には語学力とともに内容の知識が絶対に必要だからである。

この方法は大変効果的で、通訳内容の正確と時間の節約の二つを期することができた。それでも日本文学史の中世以降、近世・近代と進むに従って、どうしても落しにくい固有名詞は増えるし、ピ

デオは無いがせめて持参のカセットでほんの少しでも聴かせたい芸能もあるしで、結局日本文学史の略説だけで終わってしまい、初めに予告したジャンルや理念、ましてできれば少しはと思った美術・音楽など他の分野には、触れることができなかった。

なお山地氏と相談して、前記の⑤では「徒然草」を抄読して日本人の考え方の一端を伝え、⑥は特に学生の来ない時には、ヤノー君や既に井上靖の翻訳をも出している女性に文語文法の要点を教えた。山地氏の③は、日本歴史の基礎知



ELTEJ 教官研究室

識や日本の地理区分などを扱っていたようである。

試験と判定　ところで学生の関心や理解はどうだったかと言うと、とにかく日本の何かに興味を持ってB専攻に集った連中だから、熱心に目を輝かせて私の講義に聴き入っており、これには大変感激した。登録者は一七名でそのうち二人は早く脱落、男子二名を含む一五の顔は、じきに覚えてしまった。さて試験は、欧米の通例で一人ずつの口頭試験。そこであらかじめ一人一人と日時を約束して、決めた時間に普段授業をやる教室（何しろ狭くて、ヤノー君を入れた一五、六名が窮屈に机を囲む）に一对一で向かい合う。尤も私の場合は通訳のヤノー君がいる（懸詞）。前述のように必ずしも英語またはドイツ語が達者な学生ばかりではなく、思うことが言えなくでは困るので、自由な母国語でしゃべらせるためである。

そうした試験をしてみても、感じた、むしろ驚いたことが一、二ある。先ず、彼等はおしなべてよくしゃべる、能弁だということである。例えば私が「万葉集」とはどんな作品かと訊ねると、「現存す

る日本最古の歌集」とか「奈良時代の歌集」とかいった簡潔な答えではなく、「何世紀頃に成立した歌集で歌数は四五一六首——但しこれは数え方によつて違う——

（注、私は約四五〇〇首と覚えればよいと言ったのだが、彼等は何かの辞典が参考書を見て補つたのである）、その中には天皇・皇族から農民・乞食に至る人々の詠を含み、歌風は四期に分けられて、第一期はいつから何年までで主な歌人は誰々で、……と、こちらがストップをかけなければ五分でも一〇分でもまくしたてる。多民族国家だからか、ギリシヤ以来の雄弁術が東洋民族のこの国にも生きているのか、由来はともかく、黙っているのは知らない、考えがないと見なされる社会だから、学習成果の知識は少しでも見せようと、一生懸命述べたてるのである。「沈黙は金」ということわざは、雄弁に辟易したヨーロッパで生れたことがよく分かった。

もう一つは、それと関連があるが、細かい数字や事実をよく暗記したがることである。このこと自体は、後日役立つ結構なことに違いないが、忘れたらあるいは知ら

なければ専門辞典や参考書を見ればよいと思つている私は、自分の学生時代にそうであったように、ノートを見ながら答えてもよいと言いついたのに、大抵の学生はほとんどノートに目をやらずに、右のようにしゃべり続ける。年代や歌数などでつつかえる者はほとんどいない。それでも答え方の良否で一応判断することができ、各自に543の判定をその場で言い渡して持参の成績簿に記入署名するとともに、後日学科の方針に従つて順位をつけ、一〇名程度を合格つまり二年次にも日本専攻を認めると、ということにしたのである。

この一見きびしい処置の背景には、次の考え方があつた。一つには、ELTEは専門研究者、当面はこれから出るべきハンガリーの日本研究の指導者を養成するところ、単なる通訳や商社マンの養成機関ではない（それには別に外国貿易大学という単科大学がある）、また趣味で日本語を学びたければ、それなりの講習組織もある、ということ——日本の明治から戦前に似ている——、第二には、彼等にとつて「日本」はB専攻だから落

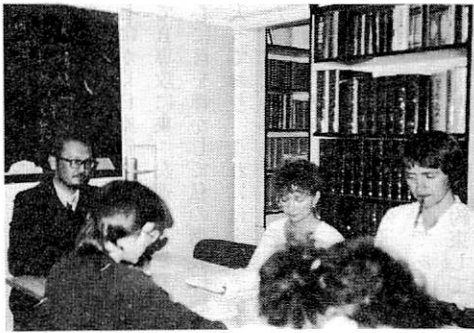
してもA専攻で学び続けることができる、ということである。「総合大学は学問の府」という考え方が生きているのであつた。

三、設備・成果など
以下、紙幅が乏しいので、やや簡略に述べる。

1 ELTE以外の日本研究機関
次に述べるアカデミー東洋文庫の他には特に知らず、日本学の講座が立つたのは前述のようにELTEが初めてだが、日本語教育機関としては、ブダペストに前述の外国貿易大学（略称「外貿大」）があり、南部の町セグドの総合大学文学部にも日本語のコースがあつて、後者は山地氏が兼任、名の如く実務家を養成する前者にはヒダシ女史と何人かの講師がいて、それぞれの教科書・方法で力を入れて（夕刊読売昭六三・一・二五参照）。また、文学部の東洋関係の教官も多く関係しているケレン・チョマ協会という団体が、私達が授業に使う教室で折々夕方から、市民相手の日本語講座を開いており、高い成果を挙げているようである。

2 参考図書類

ELTE中国東アジア学科の図



ELTE教室授業風景
山地講師、向う側は研究室

書室には、日本の本では例えば若波古典大系の何冊かや最近の日本古典文学大事典、角川古語大辞典（既刊分）、国語学辞典（大辞典ではない）、読史備要、日本を知る事典、ジャポニカ百科等々、洋書（学生達には、この方がより必要有用）ではキーン教授の古典・近代の二つのアンソロジーや *essay literature* あるいは英独仏伊露語などの翻訳・研究書いくつかなど、ごく基本的なものを含めてある程度は揃っている（一部は教室備付）が、東欧諸国の常として外貨事情から新旧の図書を輸入

することができず、新しい本はほとんどなく、そのことをあらかじめ山地氏からの書信で知った私は、個人的縁故でいくつかの出版社から辞典やシリーズものなどの寄贈を仰ぎ、基金に手配して送って貰った。

ところでハンガリーでは、他の社会主義諸国と同じく科学アカデミーが大学と並ぶ重要な研究機関で、その東洋文庫（大学からバスで一〇分、主任は山地氏夫人）をも、学生・教官は自由に利用することができる。そこには古典大系の他、思想大系、国史大系、大日本地名辞書、小学館の日本古典全集、筑摩の現代日本文学大系、角川の日本近代文学大系、学燈社の日本文学全史、日本文学研究資料叢書、平凡社の世界大百科、*Kodansha International's Encyclopedia of Japan*（以上の如きは重複を避けてELTEには無い）以下かなりの本が揃っており、私は講義の準備によく通った。貸出もしてくれる。

なおこれらの機関には、毎年基金が申請を受けたリストに基き、何十万かの予算で図書を購入・送付して援助している。

3 その他の設備

図書以外の機材・備品については、ELTE以外のことはほとんど知らないが、少なくともELTEに関する限り、相当に不便自由な状態にある。例えば私が赴任するまで、ビデオはおろかテープレコーダー一つ無く、コピー機はかつてケレシ・チョマ協会のものを使わせて貰っていた由であるが、とうに壊れて今は無く、どうしてもコピーしたい時は、なじみのホテルのビジネス・センター（タイプライターやテレックスも有料で使わせるらしい）で、一枚六〇円（市電一回の一〇倍）相当でやって貰っていた。

テープレコーダーは、持って行った小型のラジオカセットコーダーが前述のような授業の準備に大変役立ち、始業前に皆が揃うのを待つ間季節の童謡唱歌を聴かせたりもしたが、一度不注意で落して壊したら代りが見つからない。日本に送って修理を頼んでいる間、ブダペスト中歩いて探したところ、ラジオは日本製や西独・東独製、ソ連製などを大小見かけるけれども、カセットコーダーはどこにもなかったが、三日目にある電器店

で、前日までは確かに無かったシヨウウィンドウに、フィリップス製の中型のカセットコーダー（但しラジオなし）を九〇〇〇円弱で見つけ、早速買ってあとでELTEに寄贈した。因みにこの時その店にもう一台あったものも、翌々日には売れていた。大肉やパン以外の不急品は入荷の波がまことに大きく、ブダペスト中の文房具屋で赤鉛筆や大型封筒が四週間以上品切れだったことがあり、二度ほど懲りてから、自衛上買い溜めする癖がついた。

ワープロももちろん私が行くまでELTEには無く、前もって山地氏から実情を知らされていた私は、基金に頼んで卓上型を一台寄贈して貰い、私自身もそれと互換性のあるポータブルを抱えて行って、教材作りにも重宝した。山地氏はすぐマスターした卓上型で、日本語の教科書を改訂すべく推敲に精を出していた。

4 日本文学の翻訳・紹介

ハンガリーの日本研究は日まだ浅く、文学に限っても多くの作品・作家が翻訳紹介されているとは言えない。学生達も英独仏伊露などの翻訳や文献に相当程度頼らなけ

ればならないが、それでも私の在任中に「蓼食ふ虫」の訳が、行く少し前に井上靖の「補陀落渡海」その他の訳がそれぞれ単行本で出版されてよく売れていた。またこの約一〇年内に、川端の「古都」、芥川の「河童」その他、井伏の「黒い雨」、松谷みよ子の「竜の子太郎」、「俳句集」などが出版され、雑誌類にも芥川の「文芸的な、余りに文芸的な」の訳、遠藤周作の「沈黙」の抄訳と古典俳句の解説・訳、横光の「蠅」の訳などが出ている。これらは私が目にしたり貰ったりしたものでだけだから、この他にもいくつか出ているとは思いますが、万葉・源氏はもちろん、鴎外・漱石などをハンガリー語で読めるようになるのは、まだ大分先のことであろう。

こういう次第で、ハンガリーに限らず多くの外国特に東欧諸国の研究環境は、物も金も豊かになった最近の日本から見れば随分不利で遅れている面もあるが、彼等は明るくたくましく、少なくとも私の相手した学生達などは旺盛な知識欲と熱意で日本研究の初歩を踏み出しており、その努力とわれわれ仲間や基金をはじめとする関係

方面の支援とが続くならば、やがて花開いてわれわれの日本をも潤すと同時に、文化の進展と国際交流に大きく寄与すること疑いない。留任を切望されたガッラ主任以下のスタッフや、今度いつ来てくれるかとそれぞれの得意な外国語で言ったりその後便りをよこしたりする学生達の顔を懐かしく思い浮かべながら、それを願い信じて今回は筆を擱く。



ELITE中国東アジア学科

旗の出ている入口を二階に日本学コースの教室・研究室がある。解放記念日の翌日で、まだ旗が出ている。

文庫紹介⑩ 東京芸術大学付属図書館

脇本文庫

脇本文庫は、美術史家として古美術研究や文化財保護に業績を残した、故東京芸術大学名誉教授脇本十九郎（号楽之軒、明治一六年〜昭和三八年）の旧蔵になる和古書と洋装手沢本、及び脇本奨学金による受入図書、計二六三四冊（約一四五〇点）を収める。そのうち明治以前の古書は九〇〇点程度で、そのおよそ半数は芸術関係、とりわけ美術書が多く、その他にも絵入本が目立つ。江戸期刊本がほとんどだが、なかに三体詩の抄物や「曼荼羅抄釈」等、漢籍や仏書関係の興味ある写本も散見される。その内容は「脇本文庫目録」（昭和五二年三月発行）で知ることができ、当館では昭和五七年より調査を続けており、近々収集して閲覧に供されるであろう。

東京芸術大学付属図書館は、東京芸術大学の前身である東京美術学校と東京音楽学校の時代からの蔵書を受け継いでおり、美術・音楽関係の和古書の充実している。こ

とは周知の通りであり、目録としては『音楽取調掛時代所蔵目録』一〜四（昭和四四〜四七年）がある。また、貴重書は『全国国立大学所蔵貴重図書目録』（昭和四八年）鳥山大学付属図書館）に収録されているので、その内容のおおよそを窺い知ることができ、昨年十一月に創立一〇〇周年行事の一環として貴重図書展（内、和書一七八点）が催され、解題目録が発行されている。当館では、昭和五二年より継続して調査（一六六五点）と収集（一一〇四点）を行っており、既収集分については『マイクロ資料目録』一九八二年一〜一九八四年により、閲覧に供されている。

東京芸術大学付属図書館
所在地

〒一一〇

東京都台東区上野公園二二ノ八
電話 〇三ー八二八ー六一一

（文献資料部 樹下文隆）

共同研究報告

中世歌合の研究

福田 秀一

この共同研究は前年度から継続の二年目であるが、初年度にわれわれは、『館報』第二七号に記した通り、当面四つの目標を立てた。(一)中世歌合年表の作成、(二)各歌合の伝本書目の作成、(三)主要歌合の本文研究、(四)中世歌合に関する参考文献一覧の作成、である。

このうち、初年度には先ず(二)四にある程度の成果を挙げることを目ざして、(一)の礎稿とも言うべき「中世歌合年代順 一覧」(仮製)を基に、年代別に分担してカード採りを行い、同年度末にはそれらをそれぞれ分類して台紙に貼るところまで行った。

幸いに継続が認められてメンバーも増えた現年度は、それら台紙に貼ってある各歌合の伝本カードと参考文献カードとをワープロによって原稿化することを、当面の目標とした。そして九月以降、前年度に一応決めておいた入力要領によって作成した原稿のサンプルを持ち寄って入力要領の見直しを行い、一月二十三日までに各自の

分担原稿を完成すると共に、付録(仮称)として、版本「歌合部類」と扶桑拾葉集(流布本——そこには中世歌合の序跋等が多数収められている)との伝本書目をも作成した。その分量は、一頁二四行で約三〇〇頁である。

次にはこの原稿を年度内に数十部複写した後、全員で見直し、内容・形式を一層整備すると共に、特に中世歌合の伝本や研究状況に精通している専門家の何人かにも目を通して頂いて、少しでも完成に近づけた上、次年度以降(もはや当館の共同研究には応募しなかつたが)何らかの形でそれらの成果を公表して学界の役に立ちたいと考えている。

なお、初めに立てた目標の(一)は(二)の完成と共に可能になる筈であり、(三)は各自の関心に応じて進めつつある。

日本文学の特質

七十一番職人歌合の研究

福田 秀一

本共同研究については『館報』前号に一言されているが、「七十一番職人歌合」の詳しい注を付し

た独訳を完成したく、そのためにも日本中世の「職人」の実態を一層深く把握したいとの、シュナイダー教授(客員)の希望に基き、次のような研究会を行なって十分成果を得た。

第一回 七月二十五日 打合せ

第二回 八月二十二日 岩崎佳枝氏による発表(「職人歌合」の詠風と判者の目)と討論

第三回 九月十四日 徳田和夫氏による発表(杜寺参詣曼荼羅の聖性、物語性、芸能性——中世職人歌合研究の参考資料として、スライド使用)と討論

第四回 十月二十一日 島津忠夫氏による発表(「七十一番職人歌合」の序と白拍子その他の問題)と討論

第五回 十二月一日 網野善彦氏による発表(中世の職能民)と討論

論

なお、第四・五回には「七十一番職人歌合」の本文の読解についても、シュナイダー教授提出の問題点を取り上げて討議し、互いに裨益するところ大であった。また本共同研究協力者の岡見正雄博士には、福田がシュナイダー教授を案内して参上し、職人尺絵を中心

として各種の資料や研究方法についての示唆を頂いた。

昭和六十三年共同研究実施予定

研究課題	氏名	勤務先現職
百人一首	菊地 仁	山形大学人文学部 助教授
古注釈の研究	小林健二	大谷女子大学文学部 講師
	島原泰雄	皇学館大学文学部 助教授
	豊島秀範	弘前学院大学文学部 助教授
	錦 仁	秋田大学教育学部 助教授
	吉海直人	文献資料部助手
近世九州の文人研究	中山右尚	鹿児島大学教育学部 教授
	井上敏幸	福岡女子大学文学部 教授
	宮崎修多	研究情報部助手
	若木太一	長崎大学教養部 教授
願文の総合的研究	渡辺秀夫	信州大学人文学部 助教授
	小峯和明	文献資料部 助教授
	佐藤道生	宇都宮大学教育学部 講師(非)
	平 雅行	関西大学文学部 助教授
	山崎 誠	文献資料部 助教授
	山本真吾	広島大学大学院 博士課程

情報処理システムの

レベルアップについて

情報処理室 安 永 尚 志

昨年度より、進めてきた情報処理システムのレベルアップがやっと完了した。現在、従来のシステムより性能、容量ともに約2倍のシステムが導入され、どこおりなく運転されている。これも関係者一同の努力もさることながら、皆さまのご協力、ご理解のたまものであり、先ず紙面を借りて御礼申し上げます。

今回のシステムは、通算して三代目である。また、当館に一番機が設置されてから、ちょうど十年目を迎える。その意味で、当館におけるコンピュータ、すなわち国文学とコンピュータの結びつきももう一昔になった。

すなわち、昭和53年2月に共同コンピュータとして、HITAC M160IIが始めて導入され、主としてパッチ処理により国文学に関する資料の目録作成のための業務処理を行った。ついで、昭和58年11月には、二代目として同じシリーズの上位機種であるM260Dに更新された。館内業務用サ

ービスの他に、一般研究者に対するデータ処理サービス(TSSによる)を行った。また、昭和62年4月1日からは、蓄積されたデータベースの一部を全国の利用者オンラインにより提供してきた。ところで、この間の技術の進歩

及び情報社会の到来にともない、高性能コンピュータに対する多様な要求と現システム(当時のシステム)の性能との間に大きな差が生じ、高性能コンピュータへの移行、及び館内外へのデータ通信網の整備が強く望まれてきた。

一方、学術情報センターを中心とする学術情報システムの進展がある。そこで、これらの状況を考慮しながら、国文学研究に答えられるような、また多岐に渡る館内外の利用形態に応じられるような、我々独自の総合的な情報処理システムを導入することになった。

新システムの役割は、以下のよう

① 学術研究データ処理の支援
(計算も含む)及び情報処理を

通しての研究支援

② 学術情報サービス

③ 図書館業務サポート、及び目録作成、データ作成等に関する業務サポート

④ 館内外事務処理のサポート

⑤ 館内データ通信網の管理運用

⑥ 館外データ通信網の管理運用
また、利用形態としては、

① 学術研究
業務

② 情報通信

④ 図書館資料管理

④の四通りに大別できる。

学術研究としての利用は、国文学者が国文学研究のためにデータベースを作成・利用する形態と、国文学研究を支援するための先端的な情報処理システムを開発する形態とからなる。

業務としての利用は、その対象が広範であるが、主に当館の事業の一つとして、全国の利用者に提供する資料に関する情報のデータベース作成と提供である。

情報通信としての利用は、学術研究・業務利用の両方に於て、館内はもとより館外での多様な情報のやりとりを円滑かつ効果的に行うことである。

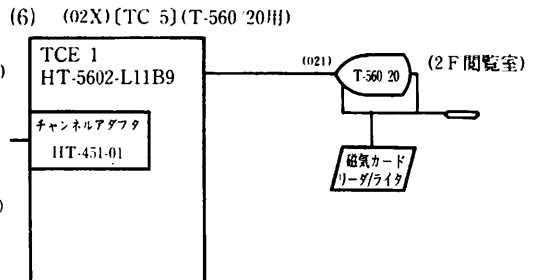
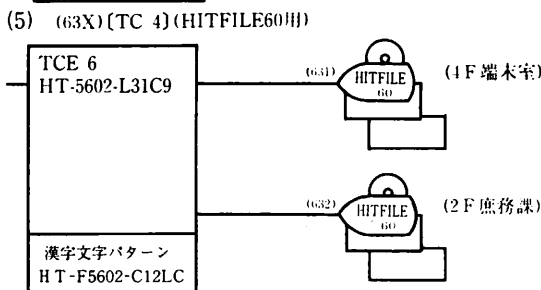
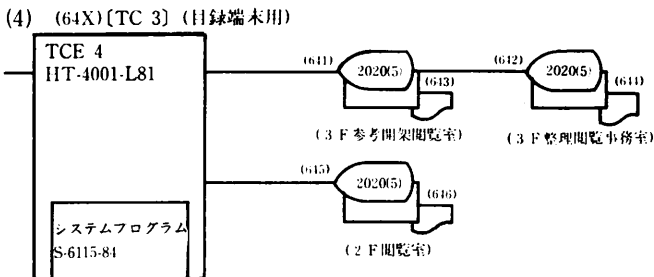
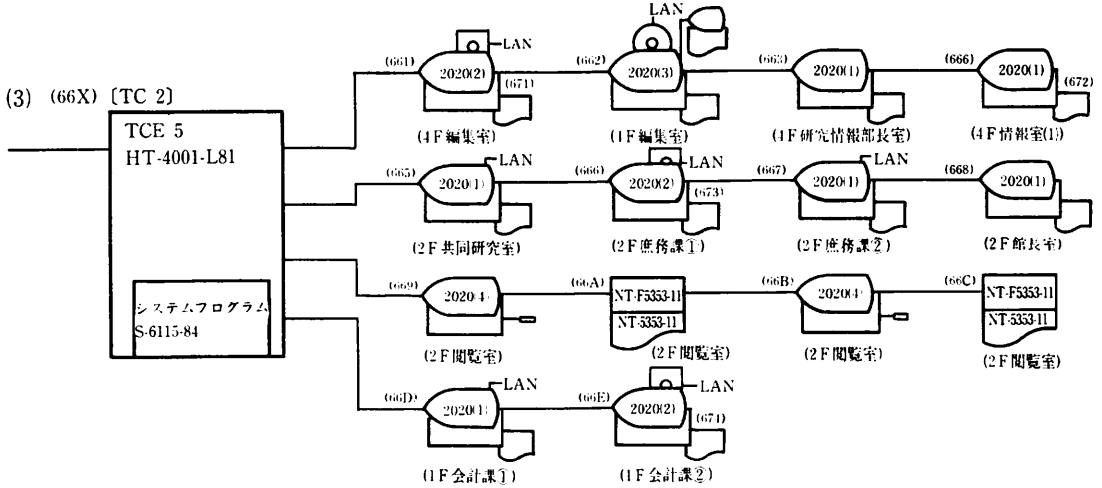
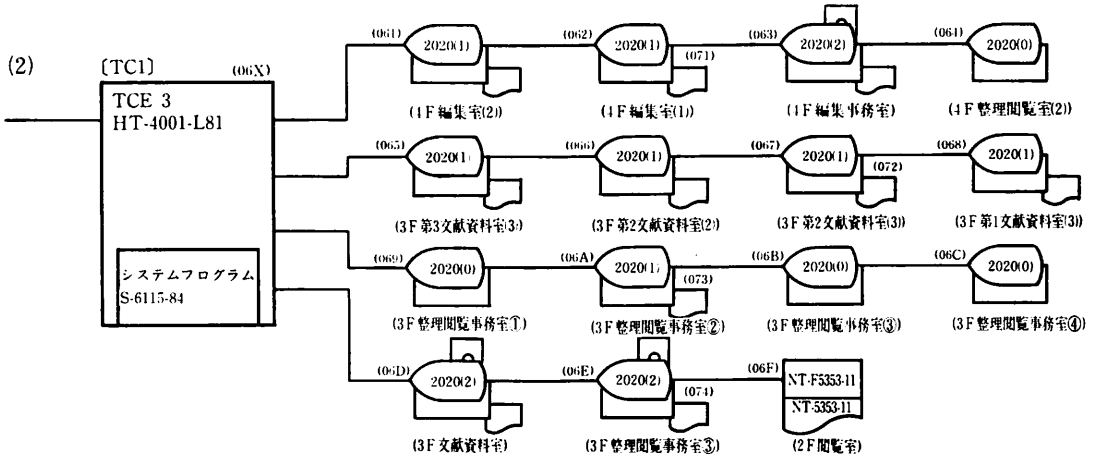
図書館資料管理としての利用は、当館の閲覧、貸出に供する資料の管理である。

なお、全ての利用形態に於て、柔軟な日本語処理機能が不可欠である。

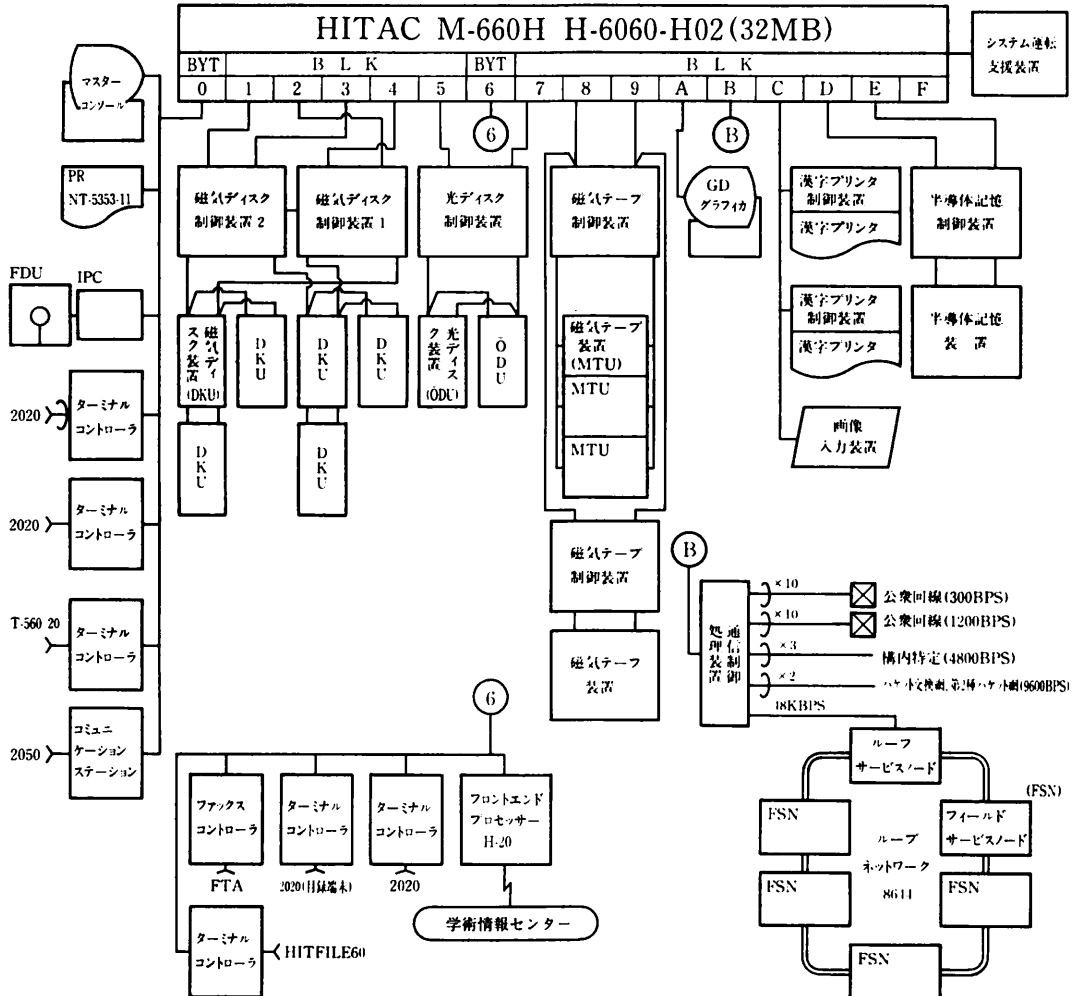
このように広範で高度な要求を、今回のシステムで直ちにすべて解決できるとは思われない。しかしながら蓄積してきた各種の情報資源やノウハウをもとに、一歩ずつ積み重ねて行きたいと考えている。

図に、新システムの構成を示す。新システムは、前述のように性能、規模、容量などが従来のほぼ2倍のシステムである。とくに、考慮した点はLAN、画像システム、図書システム、及びワークステーションの新規導入である。また、今回は設備面でも大幅な改良を行った。すなわち、LAN工事、端末室の効率利用のための工事、及び振動、騒音の問題から、耐用年数を過ぎた空調機の入替えを行った。このため、約1月に渡ってコンピュータの利用を停止せざるを得なかった。

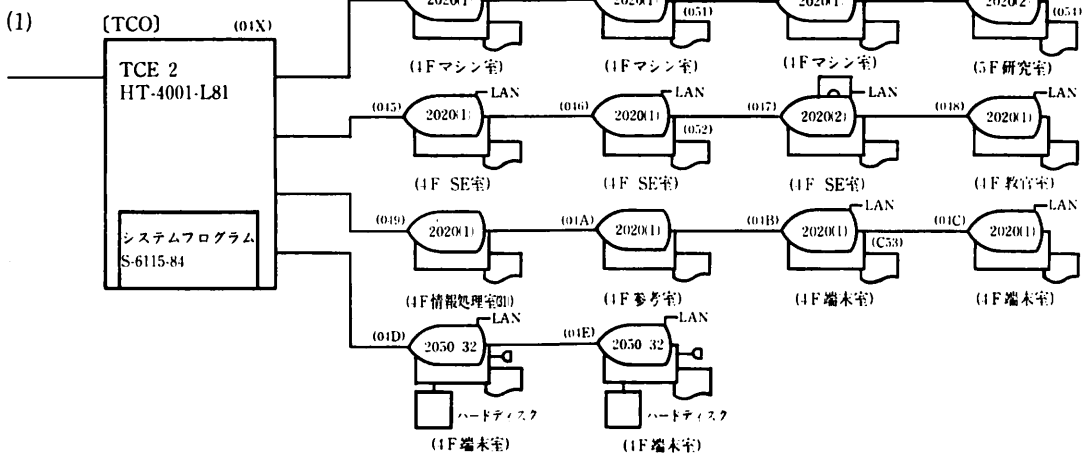
(以下13頁に続く)



システム構成図



端末構成図 (接続系統図)



新収和古書抄

昭和六十二年

法相宗二巻抄 一帖

本書は興福寺の学僧良暹が老母のために法相唯識の大意を述べた概説書で、仁治三年(一二四二)以前の成立と考えられている。本書の文体は平俗な和文で、譬喩を多用し、鎌倉旧仏教では珍らしい仏教教理書である。本書は鎌倉末期写本である。

九経注 一冊

本書は九経(恐らく大田錦城の「九経談」の如く、易・書・詩・左伝・大学・論語・孝経・中庸・孟子を指す)の要句を抜き、これを仮名交りで注解したものである。室町末・近世初期頃のものか。伝本稀れである。

三体詩抄 卷一 一冊

三体詩は宋の周弼の編集した唐代の詩集。我国では中叡円月の帰朝より三体詩講義が始まったとされ、三体詩抄の諸本は十数系統存する。本書は、寛永元年の書写で、五山僧の注の系譜を引くもの。

三教指帰私記 三巻三冊

本書は「三教指帰」の室町時代

の仮名交りの注釈。周憲の講説に於ける私注か。「天正三年隆盛乗賢房」の書写。類本に龍門文庫蔵本がある。

三教指帰注 三巻七冊

弘法大師の「三教指帰」は文章の流麗なること日本漢文学史の大雄篇である。本書はその平安末の注釈書で、覚明の撰述とされる。寛永十一年の刊記のある七冊本。書眉に書入れなどもある。

小教盛 刊一冊

縦一五・四×横二二・六釐。縹色地に遠山霞と水辺の草花を描く紙表紙。題簽欠。表紙中央に「敦盛 完」と直書。全三三丁。御伽草子二十三編の一つ。

こあつもり 刊一冊

縦二二・六×横一五・六釐。栗皮色の紙表紙(改装)。内題「こあつもり」。全一二丁。行数一七行。六段本。「説経正本集」第三所収の東大図書館本と同じもの。

風流神代巻 大本合二冊

浮世草子。都の錦作。内題「風流

神代」巻六末の数丁が新しい補写、その箇所は元禄十五年野村長兵衛の刊記がある。巻二は入れ本か。

潤色栄花娘 中本七冊

浮世草子。漁柳作。内題「潤色栄花娘一(一五)」。潤色栄花娘道中の巻上(下)。「寅のむつまじ月のはじめ」の自序あり。寅は明和七年か。刊記なし。印記「準(練木準氏)」

月花通鑑 半紙本五冊

浮世草子。大雅舎其風作。内題「月華通鑑」(巻二以後「つきはなつがんとルビ」)。「安永七戊戌年正月吉旦」とする錢屋善兵衛ほか二肆の刊記あり。

反故草子前編 一冊

稀本零葉貼込帳。堀田葦男編。江戸時代文芸篇と銘うって版本零葉五十種を収録。昭和十九年刊。

落葉籠 一冊

稀本零葉貼込帳。編者不明。伏見版「貞観政要」以下古活字版の零葉三十七種を収録。表紙裏から出た零葉の多いことを特色とする。

古梓殘葉(別本) 二冊

稀本零葉貼込帳。禿氏祐祥編。昭和四年九月杉田大学堂刊。同年

七月刊の同名書の残余を用いて仕立てたもの。宋版および丹緑本各一葉を新たに収める。

臍の茶口 小本一冊

一七丁。十方舎一丸画作。貞信画の錦絵表紙。嘉永四年宇野松栄堂近江屋善兵衛刊。二十一話の落咄と彩色刷の絵を収める。咄はほとんど新作か。国書総目録未載。序に一丸の初作「喜美談語」の名が見えるが、所在は不明。

友子 写本二冊

頼春水・春風・杏坪の自筆稿本を主として山陽・景讓の諸雜稿をも合綴せるもの。刊本未収多し。春水在坂時の若書き、杏坪の和文等見ゆ。頼潔・元緒二氏の識語あり。越前卜了軒の旧蔵なりと。

頼家藏書目録 写本(横本)一冊

頼春水自筆。家藏の書籍総六八七部をイロハの部立に連ぬ。和漢・刊写混雜。処々に各本来歴の小書あり、日本詩史一(京師武川幸順序忌諱ニフレ後ニハ其序ハ不載因テ写取附ス)、松蔭日記 写本七(江戸加川元厚ヨリ写此跋西山拙齋作匿名ナリ)等々。

新収資料紹介(26)

小敦盛 室町末期写

二軸 九・七〇

室町物語。絵巻。縦二八・二×全長(表紙を除く)・上巻約六七〇穂、下巻約七四六穂。紺地に金箔散らし、銀泥で霞等を描く紙表紙。料紙は間似合。本書に存する錯簡を正せば、横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第四(角川書店、昭51)所収の赤木文庫蔵「小敦盛絵巻」と顕著な相違はなく、絵の位置も対応する。現在、上巻一四紙、下巻一九紙。この番号により錯簡を正すと、上1〜上11、下1〜下5、上12〜14、下6〜下19の順となる。松本氏が解題で、同系統の四本(慶大本、天理本、早大本、正宗文庫本)を掲げて指摘された、「これらの絵巻は、いずれも室町末期から近世初期の頃に製作されたもので、掲出の赤木文庫本と同じく、詞書十六段、画図十五面から成る。本文も絵の構図も、ほとんど変わらない。」という点も、本書についてあてはまる。もつとも、同氏が「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』所収、三友堂、昭57)

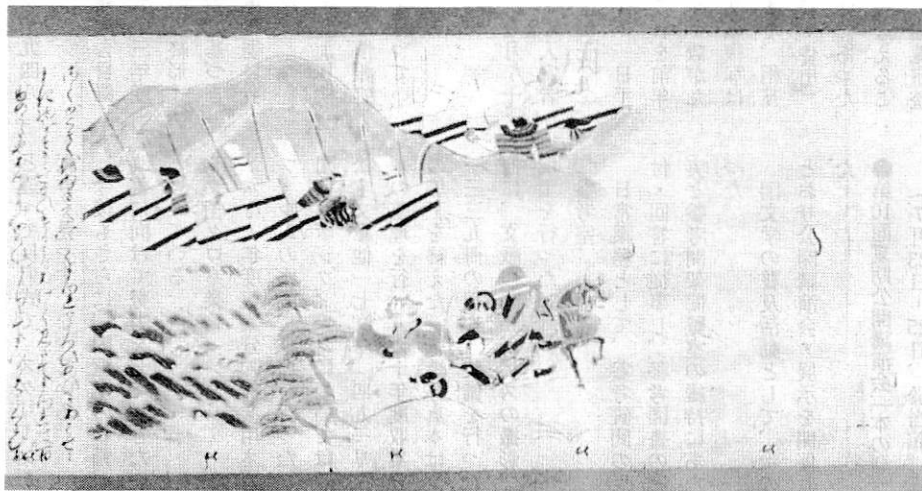
で、これらの諸本を、A(一)として同系統としながらも、その中を細分し、(イ)に属するものとして、赤木文庫本、慶大本、天理本、正宗文庫本をあげ、(ロ)に早大本をあげて、(イ)に分けた如く、これら諸本もそれぞれ、多少異なる所がある。

早大本を翻刻・紹介し、天理本・赤木文庫本との主なる違いを示された、柴田光彦氏「敦盛絵巻(早稲田大学図書館蔵)―(軍記物とその周辺)―」所収、早稲田大学出版部、昭44)を参照しながら、新収資料の「小敦盛」を検討してみると、(イ)に属する赤木文庫本に最も近いようであるが、(イ)から離れて(ロ)に近い箇所や、(イ)のいずれとも異なる箇所も見受けられ(紙幅の関係で、具体的な例示を略す)、諸本を検討するにあたって参考となる点もあろう。

松本氏「簡明目録」によれば、「小敦盛」の絵巻のうち、二軸と記されているものは早大本のみ(正宗文庫本は二軸のうちの上巻部分か。「絵巻

後半欠 大一軸」とある)で、柴田氏論文によれば、「その仕立を見るに改装のあとがあり、もと一巻であったと推定される」という。「小敦盛」の絵巻が、すべて一軸である必要はなからうし、上・下巻の切れ目がどこであるかということが意味を持つか否かは不明である。ただ、前に記した如く、本書には錯簡があり、もと如何なる状態であったかが気にかかる。本書は、上・下巻とも、軸への貼付の仕方が雑で、後に手の加えられたことは明瞭であるが、本書が製作された当初の状態は不明である。但し、或る時期の状態(当初の状態かも知れぬ)は推定できる。下巻の表紙の虫損と、下6〜8(或は下9も)までの虫損が連続するものであり、かつ下6の裏面の汚れ工合から見て、或る時期下巻は、現在の下巻第六紙(大成四二七頁上15行目「くまかゝ、申ける……」の箇所)から始まっていた、といえよう。

(整理閲覧部 小野尚志)



整理閲覧部だより

当館は昭和六十二年七月に開館十周年を迎えることができた。この間、多くの所蔵者・関係機関等の協力により所蔵資料も年々充実してきている。

例年実施している保存用ネガフィルム外部保管委託の監査に際しては、監査実施要領に基づき当部からも検査員を派遣し、寄託したフィルムの保管状況等を検査した。

この他、当部が担当する業務（資料の受入、整理、保存、利用サービス及び参考業務、公開講演会の開催、展示等）は順調に進展した。

(一)整理閲覧室

以下に各業務毎に報告する。

(1)受入業務

六十二年十二月末における今年度の資料受入数は、マイクロ資料八六八リール、図書二〇三四冊（長井氏よりの寄贈図書を含む。）逐次刊行物四二五六巻号冊であった。

長井氏寄贈図書は、故長井永太郎氏の蔵書のうち万葉集を中心とした国文学関係図書約千冊で、明

治から昭和初期にかけての複製本や研究書、原本等を含むもので受入・整理が済み次第、長井永太郎文庫として利用に供する予定である。

(2)整理業務

『マイクロ資料目録一九八七年』は、約二八〇〇件の最終回分データの入力を終え、年度内刊行に向けて、校正、編集作業を進めている。収録点数は、約八五〇〇点（三十三文庫）に達する見通しである。

前年度、創立以来のすべての資料を網羅した累積目録を刊行した和古書目録は、その後の受入分を増加目録として刊行する予定である。収録点数約百二十点となる。

古典作品典拠ファイル作成事業は、約二万五千点をパンチし、約一万五千点を古典籍総合目録著作ファイルへロードした。パンチ件数は既に十万件を突破し、校正作業も順調に進んでいる。

新刊書の整理も平常通りの進捗である。例年通り、和古書の補修を、八点、約六二二丁分を行った。

(3)古典籍総合目録作成事業

当該期間（六十二年七月～十二月）に作成したデータ件数は、書誌データが七二四三件、著作データが八三六五件、著者データが九四八件であった。

本年度第一回の古典籍総合目録委員会において、昭和六十三年度刊行予定の目録試作版の最終形式が検討された。その結論に基づき八月に行われた館内の専門委員会、実行計画をまとめた。

システム面では、今年度より検索システムの開発に入り、情報処理事室と概要設計の検討を行っている。

(4)閲覧業務

昭和六十二年下半期（七月～十二月）は、来館利用による入室者数が五二二九人（一日平均三六八人）、文献複写が二二九四八件（一日平均九〇件）であった。これを前年同期と比較すると、入室者数が九%減にもかかわらず、文献複写は三%増となっている。また、相互利用（郵送による文献複写・貸出）の申込受付は、六六三件であった。

七月には開館十周年を迎えることができた。これを機に閲覧室整備の計画を進めてきたところ、十二月には、閲覧用マイクロフィルム

ムリーターの機種更新を実施することができた。新しいマイクロフィルムリーターは、今までの機種と違って反射式で、スクリーンが大きく見やすくなっている。

今後もさらに、閲覧室の整備、改善に向けて努力をしていきたいと思っている。

(5)マイクロ室業務

六十一年度収集分の作業用ネガフィルムの作製、整理を行った。閲覧用ポジフィルムについては、松宇文庫他一七文庫、四九一リールの整理を行い、六十年度収集分の加工を終えた。紙焼写真本は、一三三九冊の製本、装備を行った。他に、文献複写サービスの撮影、加工を行った。

(二)参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

国文学の普及活動として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

●第10回夏期公開講演会「本の話」

（7月23日～25日、於当館。講演集刊行の予定）

23日 「写本から刊本へ」中国

印刷史序説「尾崎康(慶応義塾大学教授)」、「日本の本 書物の装幀」伊地知鐵男。

24日 「挿絵本と絵本」松平進(甲南女子大学教授)、「古筆」久曾神昇(愛知大学名誉教授)。

25日 「江戸の本屋」長友千代治(愛知県立大学教授)、「図書館・文庫事情 沿革と現状」朝倉治彦。

●第27回公開講演会(10月24日、於松江市・島根県民会館三階会議室)「芭蕉のころ」鈴木亨(島根大学教授)、「王朝日記文学の本質」木村正中(学習院大学教授)。

●第17回特別展示「絵巻・絵本ならびに版本の挿絵」(11月2日～14日)『国文学研究資料館特別展示目録11』を刊行)

●常設展示

第35回「近世小説」(7月20日～9月26日)

第36回「中世の文学」(10月12日～24日および11月24日～12月26日)



(7頁より) LANは、館内の各種パソコン等の接続を行い、研究、業務支援を実現するための基盤設備である。

現在、アプリケーションの構築中である。光ファイバによるループ型LANである。電子メールなどのメッセージ交換を主とし、ファイル転送等を考慮中である。

ワークステーションは、研究目的のパーソナルシステムとしての機器である。また、端末は独立したシステムとしても、利用者に高度の情報処理機能を提供するものとした。当然であるが、パーソナルな各種機能の他に、ホストデータベースとのリンクを重視した。

さらに、多様な機能として、CD-ROMの活用なども考慮した。

画像システムは、原文献資料システムの実現を目指したものである。原文献資料を入力、蓄積、検索、提示、伝送するためのシステムである。入力システムでは、オンライン、オフラインの画像入力専用システムを導入した。蓄積システムは、8ドライブを持つ光ディスク装置とした。これにより、同時に約10万枚程度の原文献資料をアクセスできる(片面とする)。提示システムは、従来の機器に加え、ワークステーションを用いる予定である。伝送システムは、高精細ファクシミリをチャネ

委員会日誌

昭和六十二年

9月17日 情報処理システム運用委員会(第一回)

10月23日 国文学文献資料調査員会議(近畿地区)

11月6日 国際日本文学研究集会委員会(第三回)

11月24日 国文学文献資料調査員会議(東北地区)

12月8日 大学院教育協力委員会(第一回)

12月11日 共同研究委員会(第二回)

昭和六十三年

1月28日 国文学文献資料収集計画委員会(第二回)

2月9日 共同研究委員会(第三回)

3月10日 情報処理システム運用委員会(第二回)

3月15日 古典籍総合目録委員会(第二回)

評議員会議の開催について

本年度第二回評議員会議が、昭和六十三年三月十八日(金)に開催され、議事は、管理運営の概況、昭和六十三年度予算内示及び昭和六十三年度事業計画について評議が行われた。

運営協議員会議の開催について

本年度第二回運営協議員会議が昭和六十三年二月十九日(金)に開催され、議事は、教官人事、管理運営の概況、昭和六十三年度事業計画について協議が行われた。

第三回運営協議員会議が昭和六十三年三月二十二日(火)に開催され、議事は、教官人事、当面の諸問題について協議が行われた。

人事異動(昭和62年9月、昭和63年3月)(併任)昭和62年10月1日～昭和63年3月31日

文部教官(文献資料部助教)

下西善三郎(北海道教育大学教育学部助教)

さらに、データベースの効率化、性能向上や、全体的な運用のしやすさなどを考慮して、ディスクキャッシュ、カセットMT、半導体ディスク等を導入している。

国際日本文学研究集会

昭和六十二年十一月六日、七日の両日にわたり、当館において、第一回国際日本文学研究集会が開催された。九本の研究発表と、ハンブルグ大学教授ローラント・シュナイダー氏の「日本文学におけるパロディ」、ロンドン大学名誉教授パトリック・G・オニール氏の「曲舞」と題する公開講演が行なわれた。

発表者は、日本在住の若い外国人研究者が多く、清新かつ燃意のこもった発表を聞くことができた。また日本人研究者の発表も、重厚で創見

に満ちたものであり、発表後の討議も充実した。公開講演は、両氏の長年にわたる日本文学研究の成果の一端を、見事な日本語で話され、聴衆を魅了した。

研究会は、年々発表応募者、参加者ともに増加の傾向を示しており、本年も百名近くの参加者があつて盛会であった。

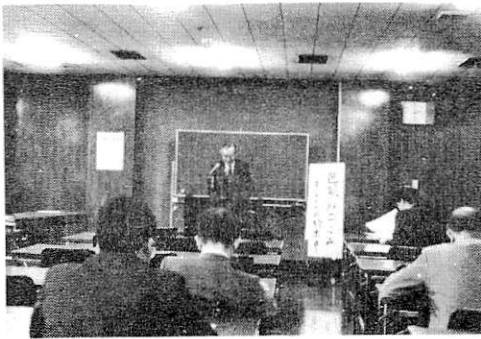
なお本集会の「会議録」が当館において編纂されている。目次は下段のとおり。
(情報室)

公開講演会

六十二年十月二十四日、島根県民会館に於いて、当館主催の公開講演会を開催した。講師の鈴木亨、島根大学教授には「芭蕉のこころ」、木村正中学習院大学教授には「王朝日記文学の本質」の題で、それぞれ御専門の立場から興味深いお話をいただいた。当日は雨となつたが、県内の高等学校の国語科の先生を始めとして、約八十名ほどの古典愛好の方々が集まり、熱心に両講師のお話を聴講された。講演のあと、約三十分ほど、講師と小山

館長を囲んで質疑応答が行われた。当館では、六月上旬の土曜、七月末の木金土曜の三日、十月下旬の土曜と、年三回の公開講演会を行つているが、特に秋の一日は東京以外の地で、地もとの大学や文献資料調査員の方々の協力を得て、公開講演会を開催している。これまで、京都、福岡、仙台、名古屋、金沢、松山で開催してきた。松江市に続いて六十三年度は熊本市で行う予定で目下準備中である。

(参考室)



国際日本文学研究集会会議録(第11回)

目次

- あいさつ 小山弘志
- 「万葉集」の称讃歌と「詩経」の頌詩との比較 孫久富
- 万葉集の「今夜」「明日」について 稲岡耕二
- 演劇における八百屋お七像 ヴァレリー・ダラム
からくりと竹本義太夫 諏訪春雄
- シュルレアリスムの絵を先取りした 朝太郎の詩 月村麗子
- 円地文学における「霊的なもの」 アイリーン・B・ミカルス・アダチ
をみなへし・あさがほ、そして紫式部のあさがほ 宋 貴英
- 「讃岐典侍日記」の表現 林 水福
- 六条家歌人の個性、特に藤原清輔の場合 リューベン・M・ゲーリング
- 《公開講演》
日本文学におけるパロディ
ローラント・シュナイダー
- 舞 バトリック・G・オニール
- 参加者名簿

利用者へのお知らせ

◆マイクロフィルムリーダーの機種更新について

このたび閲覧室のマイクロフィルムリーダー6台を、新しい機種に更新いたしました。今までの機種は、スクリーンが透過式で小さかったのですが、新しいリーダーは反射式で、大きく見やすくなっています。レンズも交換式から無段階のズームレンズに変わりました。操作は簡単ですが、初めてお使いになられる方は、カウンターの係員にお申出ください。

なお、6台のマイクロフィルムリーダーのうち、1台はマイクロフィッシュ専用リーダーとなっています。

◆所蔵目録刊行のご案内

当館では毎年『マイクロ資料目録』『和古書目録』『逐次刊行物目録』を刊行しておりますが、このたび、これらの目録の最新版が出来上りましたので、ご案内いたします。

(1)『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八七年』(第11冊)

この目録には、三〇所蔵者(文庫)分、八、六二六点が収録されています。そのうち一一所蔵者(文庫)が、今回新たに収録されるものです。

収録所蔵者(文庫)は、次のとおりです(*印は新規収録分)。
文庫No 所蔵者

- 21 高松宮
- 30 刈谷市立刈谷図書館(村上文庫)
- 32 水府明徳会彰考館
- 34 神宮文庫
- 38 射和文庫
- 56 市立函館図書館
- 73 今治市河野信一記念文化館
- 85 *市立飯田図書館(堀家)
- 88 東京芸術大学附属図書館
- 99 高知県立図書館(山内文庫)
- 204 静岡県立中央図書館(葵文庫)
- 216 学習院大学国語国文学研究室
- 225 *University of California, Berkeley
- 229 鶴岡市郷土資料館
- 238 法政大学能楽研究所(鴻山文庫)

- 251 会津若松市立会津図書館
- 252 秋田県立秋田図書館(時雨庵文庫)
- 253 *岐阜市立図書館
- 254 *富山大学附属図書館(ヘルン文庫)
- 255 新城市教育委員会(牧野文庫)
- 257 大和文華館
- 258 白杵市立白杵図書館
- 260 東京都立中央図書館(東京誌料)
- 267 * Kungl. Biblioteket Japanese Collection of A.F. Nordenskiöld
- 268 *宇部市立図書館(新井文庫)
- *6 *大橋政勝(たつた川文庫)
- *2 *林田良平(蝸牛廬文庫)
- *8 *矢口米三(矢口丹波記念文庫)
- 13 *遊行寺
- 31 *吉永登(吉永文庫)

(2)『国文学研究資料館蔵和古書目録増加4(一九八七)』

この目録は、増加目録としては四冊目のもので、昨年三月刊行の累積版『和古書目録一九七二—一九八六』以降、一年間に収集した

和古書(写本・版本)一二五点が収録されています。

(3)『国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録一九八八年』

収録誌数は、前年分より七六誌増え、三、二五一タイトルで、昨年十一月末までの受入れ分が収録されています。それ以降の受入れ分については、カウンターで係員におたずねください。

◆新指定貴重書

当館では新規受入図書の中から、特に資料的価値が高いと認められるものを選んで、貴重書に指定しておりますが、このたび次の資料が新たに貴重書に指定されました。これによって貴重書は、計七〇点となりました。

・『小敦盛』(写・奈良絵本)

◆マイクロ資料目録の市販について

『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八六年(縮刷版)』(第10冊)が笠間書院より刊行され市販されています(定価六、五〇〇円)。既刊九冊とあわせて御利用ください。

昭和六十三年度春季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。

以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定なしか、または大会期日未定。

- 解釈学会 ①千一〇一 千代田区神田 神保町二一四六第2十勝ビル
- 教育出版センター新社内
- 近代語学会 ①千一六〇 新宿区北新宿三一一〇一〇一五〇七
- 国語学会 ①千一〇一 千代田区神田 錦町三十一 武蔵野書院気付
- ②五月二一〜二二日 ③明治大学駿河台校舎
- 古事記学会 ①千一五〇 渋谷区東四一一〇一 二八国学院大学文学部
- 部日本文学第二研究室 ②六月二五〜二七日 ③国学院大学 栃木短期大学
- 古代文学会 ①千一五七 世田谷区 桜ヶ丘四一五一〇一三〇八
- 阿部寛子方
- 上代文学会 ①千一五〇 渋谷区東四一一〇一 二八国学院大学文学部
- 部日本文学第一研究室内 ②五月

- 一四〜一六日 ③新潟大学 人文学部
- 説話文学会 ①千四五三 名古屋市中村区 稲葉地町七一 同朋大学
- 文学部 国文学科 沼波研究室内 ②六月二五〜二六日 ③中京大学
- 全国大学国語国文学会 ①千一〇一 千代田区 猿楽町一三一一 桜楓社 気付 ②六月一〜二日 ③青山学院大学
- 中古文学会 ①千一五〇 渋谷区東四一一〇一 二八国学院大学 日本文学第四(小林)研究室内 ②五月一四〜一五日 ③明治大学 大学会館
- 中世文学会 ①千一四一 品川区大崎四一一一 六立正大学 文学部
- 国文学科第一研究室内 ②五月二八〜三〇日 ③鶴見大学
- 日本演劇学会 ①千一六〇 新宿区西早稲田一六一 一 早稲田大学 演劇博物館内 ②五月二二日 ③早稲田大学 小野講堂(七号館)
- 日本歌謡学会 ①千一五〇 渋谷区東四一一〇一 二八国学院大学 文学部 第七研究室内 ②五月一四〜一五日 ③国学院大学 百周年記念館

- 日本近世文学会 ①千一五四 世田谷区 駒沢一〜三 一 駒沢大学 文学部 富士研究室内 ②六月二五〜二六日 ③日本大学 本部
- 日本近代文学会 ①千一九二〜一〇三八 王子市 東中野 七四二〜一 中央大学 文学部 国文学研究室内
- 日本口承文学会 ①千一六〇 新宿区 西新宿 八一四一五(財)ラポ
- 国際交流センター 広報部 気付 ②六月四〜五日 ③島根大学
- 日本文学協会 ①千一七〇 豊島区 南大塚 二一七一〜一〇 ②七月九日 ③和光大学
- 日本文学風土学会 ①千二一四 崎市 多摩区 東三田 二一一 一 専修大学 文学部 国文学研究室内 ②五月二二日 ③専修大学 神田校舎
- 日本文芸研究会 ①千九八〇 仙台市 川内 東北大学 文学部内 ②六月一〜一二日 ③東北大学 文学部 文・教大 講義室
- 俳文学会 ①千六〇 五京都市 東山区 東山七条 京都女子大学 文学部 浜千代 研究室内
- 表現学会 ①千四八〇 一 一 愛知県 愛知郡 長久手町 長湫 片平 九愛知 淑徳大学内 ①五月二八〜二九日 ③愛媛大学
- 仏教文学会 ①千一〇 二 千代田区

三番町六番地 二松学舎大学(東部) 千六〇〇 京都市 下京区 七条 大宮龍谷大学(西部)

萬葉学会 ①千五六五 吹田市 千里 山東三関西大学 国文学研究室内 美夫君志会 ①千四六六 名古屋 市 昭和区 八事 本町一〇一 一 二 中京大学 文学部 国文学研究室内 ②七月一六〜一八日 ③中京大学 文学部 国文学研究室内

和歌文学会 ①千一五六 世田谷区 桜上水 三一二 五 一 四〇 日本大学 文理学部 国文学研究室内

館報入手ご希望の方は 郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料(切手)を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報 第三十号 昭和六十三年三月発行

編集・発行者 編集・発行者 国文学研究資料館 東京都品川区豊町一六一〇 郵便番号一四二 電話(七八五)七一二(代) 印刷所 株式会社 三興